

都乃河勇人
Yuna Tea



ウakuウaku Yumetodoki

ウィークエンド アーマゲドン

都乃河勇人

イラスト／Tea

目次

[第一章](#)

[第二章](#)

[第三章](#)

[第四章](#)

[第五章](#)

[Afterschool Daydreamer](#)

第一章

(一)

世界は無数に存在する。

日々の個人の選択、歴史を揺るがす偉人達の決断、宇宙においては偶然の物体の衝突による生命の生まれる星の存在、果ては開闢の大爆発によって生まれた物質と物理法則の差異、ありとあらゆるものが世界を違った形に作り変える。

「魔法」という超常的な法則を用いる世界もその中には存在する。

それらは偉大な力を持ち、無数の世界を行き来できるまでに成長することもある。

そうした個の世界を超越した者達には、一つの伝説が語られる。

『ある一つの世界にたどり着くことが出来れば、途方もない力が手に入る』

なぜこんな話が本来繋がりのない世界同士に広まっているのか疑問が浮かぶが、それはきつと実際に手にした何者かが、わざわざ多数の世界を回って伝説として残るように広めていった、ということなのだろう。

すると当然、世界を超越する力を持つ者が、更なる力を求めてその世界をに殺到し始めるわけである。

そして……今まさに、一人の黒衣を身に纏いし異形の魔王が、その世界へと到達しその一步を踏みしめた。

——だが。

「はいその黒いのー、ここは立ち入り禁止だから速やか立ち去りなさいー」

異界の波のトンネルを抜けると、そこは体育館だった。

魔王には投げかけられた言葉の意味など知るよしもなかったが、それが実に投げ槍で事務的なものであることは容易に想像できる口調だった。

見れば、言葉の主は、元の世界にもいたゴミのような存在である人間の少女。長い黒髪を雑に束ね、魔王には見たこともない奇怪な衣装に身を包み、手には発言を増幅するための装置と思われる楽器のようなものが握られている。

つまり、制服の黒髪少女が、拡声器で帰れと言っているのだ。

魔王の世界を超越した達成感、感動は激しく薄らいでいた。

異世界の者なら、元いた世界を恐怖で統べし黒衣の魔王の存在を知らぬとしても無理はないが、体躯は優に三倍は差があり、魔王の持つ魔力のプレッシャーは力のないものでも感じ取ることが出来るほどの強力。だというのに一切の物怖じもせず、雑に言葉を投げかけてくるこのゴミは、相当なアホなのだろうか。

魔王はつい目の前のゴミに気を取られてしまっていたが、改めて黙

殺を決め込むと、己が身の変化をようやく感じる事ができた。

（オオオオ……すばらしい……）

その身に漲るかつてない力に歓喜する。

この地に到達しただけで、魔王の力は数倍に跳ね上がったようだ。

「言葉が通じないタイプか？ 英語ならどうだろう……」

ちようどいい。何事かをつぶやいているゴミが目障りになってきたところだ、と魔王は魔力を開放し始める。

……魔王は生殺与奪はすべて己が手の内にある、そう思考する邪悪な存在だった。

「へい！ アイミョアフレン！ マイナーミーズハルナ！」

……ハルナと名乗った少女は授業中でもなるべくきちんとした英語の発音をしよう、そう思考する真面目な少女だった。

しかし残念なことに発音は達者というわけではなく、日本語英語を無理やり流暢っぽく言っているようにしか聞こえない、という悲しみを背負っていた。

『消し飛べ』

「うん？」

理解できない言葉に素っ頓狂な声を上げるハルナに、紫電の如き魔力の波動が襲い掛かる。さらに魔王は全身から魔力を放ち、周囲に破壊の暴風を巻き起こす。

魔王にとっては心地良い、破壊と蹂躪という行動。

その膨大な魔力により、元来長い時間を掛けて発動させる大魔法を、二連続で行使。

魔王を無二、無双の絶対支配者たらしめている所以であった。

『……む？』

魔王は周囲の建物ごと更地にする勢いで、いつもより数倍強力な魔法を放ったつもりだったが、周囲の壁は破壊どころかヒビの一つも入っていない。いいところ梯子がぎし、と鳴り、マットから埃が舞う程度だった。

床に落ちているガラス片は、初めからあったもので、

魔法が失敗したわけでも、魔王自身の力が衰えていたわけでもない。

単純にそんな程度ではびくともしない程度に強化され、周囲のものは硬くなっていたのだった。

『な、何で出来ているのだ……これは!?』

ひとしきり驚愕するも、さらなる衝撃が魔王を襲う。

眼前のゴミと思っていた物体は、身じろぎ一つすることなく、まるで意にも介していないようにその場に佇んだままだったのである。

「対話不能、残念」

ハルナはポケットから金属のホイッスルを取り出すと、口に加え、それを吹き鳴らす。

甲高い音が響くとはほぼ同時、ハルナの背後の扉から同じ制服を着た、十数人の少年少女が殺到してきた。

先頭に躍り出た少年の手には光をまとった剣が握られていた。

後方に陣取った生徒達も、長銃のようなもの、弦も矢もない弓な

ど、武器らしきものを構えた。

……魔王は狼狽した。

自身の強大な魔力がさらに強力になったというのに、目の前の人間達はまったく畏怖を抱いていないのである。そして事実、そのうちの一人に全力の魔法を放ったのだが、微塵も効果がない。

そんな程度の攻撃しかしてこない敵に、畏怖など抱きようもない。すなわち、目の前の意気揚々と武器を構える人間達は、すべてそのレベルの相手だということである。

さらにその数は増え、槍や盾を持った生徒達が魔王を取り囲み始めた。

「さっきの攻撃、連続して打てるものじゃない。突っ込んで大丈夫」

先頭の少年にハルナが指示を出す。その言葉に少年は頷くと、スタンスを広げ、剣を青眼に構えた。

「ついでに、弱点は多分両肩のアーマーについてる宝石。あれ壊したら魔法が打てなくなるか、弱くなるかするはず」

ハルナは魔王の攻撃の際、そこに魔力が集中したことを目聡く見つけていた。

本人の洞察力の鋭さもあるが、ハルナには『解析』の能力が備わっている。

簡単に言うと、相手の弱点や予備動作等、あらゆる情報をハルナは『知っている』のである。

「じゃあ、あとはいつもの感じで頼んだよミナヒト君」

「わかったけど、なんか雑だなあ」

ミナヒト、と呼ばれた少年は苦笑交じりに零す。

「だってザコっぽいだろ」

ハルナは『解析』の能力により、すでに相手の実力を把握していた。

加えて、剣を扱い、自身の身体能力を引き上げる近接系の能力の持ち主であるミナヒトであれば、近接戦で圧倒するであろうとも。

「油断はしないようにする」

言いながら、ミナヒトは剣を握り直す。

戦闘において油断の二文字を払拭させるミナヒトの意識は、ハルナに強い信頼感を与えており、頼れる仲間の筆頭格として位置づいている。

「こういうときさ、剣がちゃきつてなるの、あれ刃を留める金具が緩んでたりして、手入れできてない感じらしいな」

「……集中しなよ、リーダー」

ハルナの緊張感のなさに呆れるミナヒトだったが、余裕の表れは当然であった。

ハルナが予め展開していた無数の防壁の効果は、魔王渾身の攻撃を以ってしても人や物に傷ひとつつけられなかったからだ。同規模の攻撃を何度出そうとも、結果は変わらないだろう。

「じゃあ……遠隔班！」

ハルナの号令に、後ろに控えた数人の生徒達がその手の武器を構える。

「シュウヤ、頼むぞ」

「いつでもこいやあ！」

後方の生徒の中で銃を構えた生徒、ミナヒトがシュウヤと呼んだ生徒の全身を、青白い光が覆う。

シュウヤが手にしているものは、銃といっても一般的な火薬で弾丸を打ち出すものではない。推力、弾丸が共に魔力という、いわば魔法使いの杖のようなものだ。

シュウヤの纏う青白い光は、その銃身に吸収されていく。魔力という名の弾丸が籠められたのである。

光の剣、魔弾の銃、防御障壁、そのいずれもが、生徒達の魔力による所業だった。

「戦闘、開始！」

ハルナが叫ぶと、生徒達の放つ光弾が一齐に魔王へと殺到していった。

『ム、ムオオオオッ!?』

魔王の困惑と驚愕は続く。

己の強大な魔力を持って、障壁を常に張り続けており、魔力攻撃に対する防御は万全であった。

にも拘らず、光弾は魔王の身に次々と炸裂していく。

完全に防ぐとはいかずとも、障壁により威力は弱まっているはずだが、それでも尚、その一撃一撃は十分過ぎるほどに重い。

もはや蹂躪どころの話ではない。

魔王は防御にその大半の魔力を用いざるを得なかった。

『と、止めねば……!』

魔王は光弾の発生源へ向け、なけなしの魔力で火球を打ち込む。

それは着弾後、周囲で炎の嵐が吹き荒れ、瞬く間に敵陣を灰燼に帰すというものだったのだが……。

『な、なな何い!?』

確かに火球は着弾し、炸裂し、炎を巻き上げたものの、魔王を襲う光弾の勢いが衰えることはなかった。

見れば、先ほど一番最初に魔王の前に立ちはだかった少女、ハルナが光弾を放つ生徒達の前に魔力の防壁を張り巡らせているようだった。

それだけではない。さらに最後方の数人の生徒も同様の防壁を張っているようだった。

魔王は建物が異常に頑健であることを疑問に思っていたが、それは生徒達の防壁による作用だと理解した。

『ば、バカな、こんな!?』

明らかに魔王のものよりも強力な防御魔法である。

驚愕を通り越し、すでに絶望に変わっていた。

もっと早く気付くべきだったのである。やばい力をもたらすところに住んでいる者は、当然やばい力を持っているのである。

魔王は元いた世界の人間をゴミ扱いしていたが、姿形は同じでもここはそういうやばい場所なのだ。

そして防戦一方の魔王に、凄まじい速度で迫るものがいた。

「たああっ!!」

ミナヒトである。

気合の掛け声と共に魔王の頭上へ跳躍すると、剣を上段に振りかぶる。

障壁の展開で手一杯であった魔王には、それに対し為す術もない。

ミナヒトの剣は魔王の右の肩口に振り下ろされ、魔王の身に付けていた宝石を一刀両断にした。

『お、おのれえ!』

魔王は左手を、その切り裂かれた右肩に翳す。瞬時に傷は癒え、切り裂かれたはずの宝石も復元された。

宝石は確かに魔王の魔力の源であり、弱点である。だが、魔王は強力な復元の魔法を用いることによりその弱点をカバーしていた。

数々の勇者達が魔王の強力な魔法を掻い潜り、苦心の末にようやく浴びせた一太刀、それをあざ笑うかのように無に帰す復元の魔法。本来であれば、魔王に挑む勇者達を絶望の淵に叩き込んできた状況であ

る。

「治るのか。なら、遠慮は要らないな」

だが、ミナヒトは絶望どころか意気揚々と魔王に踊りかかっていた。

魔王には一切捉えきれない速度で、その周囲を縦横無尽に飛び回る。そしてその移動の軌跡の通り、魔王の身体に無数の傷が生まれていく。

ミナヒトは命まで奪うつもりはないので、致命傷にはならないように気を遣って斬り付けていたのだが、魔王にとってそれはもはや、ただ捌り殺しを楽しんでいるようにしか見えない。

斬られ、治し、常に光弾を食らい、痛いので障壁を強化しようとする、もっと斬られる……。

魔王は泣きそうだった。

『か、帰ったらもう……田舎に引っ込んでおとなしくしていよう……』

そしてその身以上にプライドがズタボロにされていた。

もはやこの場を生き抜き、元いた世界に戻る以外考えられなくなつた頃、不意に魔王への攻撃がやむ。

『ん……？』

今度は一匹の獣のようなものが魔王に向かって駆け寄ってきた。

すべて白銀色の金属で構成された、大型のネコ科の猛獣のようであった。フォルムとしては細身の豹、あるいは猫がそのまま大きくなつた、という感じである。

魔王の元いた世界でも魔力で動く金属製の人形などは存在していたが、この場においてはそうしたものと同じとは思えない。

『く、くるなあっ！』

先ほどのミナヒトと比べればずいぶん動きは遅いが、恐怖に駆られた魔王にとっては何もかもが脅威で、堪らずその金属の獣に向かい紫電の魔法を放ってしまう。

すると、魔法が到達するなり獣は四肢と胴体をバラバラにし、四散

した。

確かに粉碎するつもりで放った魔法だが、あっけなくその目的が達成されたことに逆に戸惑う。

が、その四散した獣はバラバラのまま魔王の背後に高速で飛来し、再び元の猫科動物の姿へ合体を果たす。

『あ』

魔王が振り向くや否や、金属の獣は魔王に飛び掛り、その首筋に噛み付いた。

そしてそのまま数倍はある巨体を首だけで振り回し、魔王が現れた扉の方に放り投げる。

『ああああああ!!』

魔王はそのまま扉の向こう、異次元の空間へと消えていった。

……こうして世界は救われたのである。

(二)

土曜日の異次元から来た黒い異世界の魔王の襲撃から日曜日を挟んで、月曜日。

戦闘のあった扉のある体育館の隣の校舎では普通に授業が行われ、そして今放課後を迎えようとしていた。

すべては戦闘に参加した生徒達の通う学校の敷地内で起こった出来事なのである。

生徒達は高校生であり、その身分に相応しい学業の時間を過ごしていた。

少し違うところがあるとすれば、一つ、特別授業で戦闘に関係するものがある、二つ、毎週土曜日に何かしらの敵の襲撃があり、それを退治し追いつくこと。

その二点を除けば、朝方に登校後は勉強とたまに運動、夕方前に一日の学業が終わる、というごく当たり前の高校生活だった。

「今週も来るんだよなあ」

「飽きたか？」

一年生のクラスで隣同士の席に着くミナヒト、シュウヤの二人は、帰りのホームルーム中に小声で会話をする。

入学からほんの二ヵ月、夏も間近の梅雨の時期。外は晴れで、気持ちがダレる程度には暑さを感じる。

そんな茹だるさの中でのシュウヤの発言は、ミナヒトには相当に投げやりなものに聞こえた。

「またこないだみたいなのザコだどつまんないじゃん」

「弱かったな……」

二人に散々な言われ方をされる異世界の黒衣の魔王だが、彼の元いた世界では世界を統べるほどの力を持っていたわけで、決して弱い存在ではない。この世界の高校生が強すぎるのである。

「なんで週一なんだろうーなー？」

「あの扉と他の世界が繋がるのが、週一回だからだろ」

週に一回、土曜日にだけ扉は開く。

……というよりは、扉の力が強まると言った方がいいかもしれない。

「もっとバンバン呼んでよくねー？」

「よくねーよ」

現在ではガラスに照明を当てるという、なんとも単純な手段で外部からの侵入を軽減できている。どうやら次元を渡ってくる際、そのガラスと光で出口が見えなくなるらしい。

こうした対策を採らなければ、シュウヤの言うようにバンバン侵入者が現れることだろうが……。

「今は楽勝でも、本当に強いのが来たら困るだろう」

事実、かつて迎撃の態勢が整っていない頃には、周囲に被害が及ぶようなことが多々あった。

きちんと対応すれば何も問題はないが、いい加減なことをした時には、どうなるかわからない。

「強いのか……そんな来たらなあ……」

シュウヤはしばし考える。

「燃えるべ？」

「勝手に燃えてアフロにでもなれよ」

後方からの射撃がメインの人間と違い、接近戦用の力しか持たないミナヒトは、前に出て戦わなければならない。それは防壁を張つてもらい、援護射撃が飛んでくるとしても気を遣うし疲れるのだ。

あまり燃えるだのと言っていられない事情がミナヒトにはあった。

「だいたい、苦戦してる間に次のも来たら、手に負えないだろ」

「平日それで潰れるなら、苦戦してーなー」

シュウヤは勉強が嫌いなだけであつた。

「はーい、しーずーカーにー」

教壇に立つ先生の言葉に、二人は会話を切り上げる。

ミナヒトは窓の外に目を向けた。窓から見える景色は、空の青さこそ他のどことも変わらないが、白い雲の影に揺らめく青い炎のような

ものが見て取れる。体育館にある『扉』を中心に、ドーム状に形成されているフィールドがそう見せているようだった。

学校……というより、異世界からの侵略者の迎撃施設の敷地は、ドーム状のフィールドの境界にそって作られている。

そのフィールドの中では、魔道力学とでも言うべき、通常の物理法則とは異なった作用が働く。平たく言えば、フィールドの中では魔法が使える、ということだった。

と言っても誰でも使えるというものではなく、強さや性質には大きな個人差があり、さらには年齢的に十六歳程度がピークで、そこから歳を重ねるごとに大きく力が下がっていく。危険といえば危険な状況に高校生達が放り込まれているのは、そうした理由からである。

限られた人間が、限られた期間だけ体験できること。そうしたものに憧れを持って、難関の受験を乗り切つてこの学校に入学したわけなのだから、シュウヤのように更なる充実感を求める気持ちも、ミナヒトには理解できる。

その懸念もなく純粹に戦いを楽しもうとする姿は、頭の固い自分にはうらやましいくらいであった。

「じゃあ、今日はここまでー」

先生の話が終わり、号令の後、教室内がわっと騒がしくなる。生徒達はそれぞれ思い思いの放課後を過ごすことになるのだが。

「うーしミナヒト、今日も特訓やんべ」

「あいよ」

二人は特に課せられたわけでもなく、自主的に戦闘の訓練に向かった。

男子勢は大体、この二人のように学校生活を戦闘中心に捉えていた。

一方で女子勢の捉え方は様々だった。

「うわあああん、また参加できなかったー！」

「……いや、戦闘に出らんないなら出らんないでいいだろ。あぶないし」

「別に……参加したいってわけじゃないんだけどー」

この二人のようにドライな生徒もいたのだった。

「おい、どっちなんだよ。ていうか大体、いつまで経っても機獣作れないのが悪い」

「出来ないんだよー。アイディアがまとまらないんだよー。はるちゃん一緒に考えてよおー」

「ああ、もう……」

ハルナに泣き付いているのは、魔導機獣使いとして入学したはずの少女、アシノである。

魔導機獣とは、先の戦闘にも参加していた、金属の機械人形の総称である。大半が獣の形を模して作られるため、獣と呼ばれることとなっていた。

魔導機獣は素養のあるものにしか作ることとはできず、また製作者以

外に操作することは出来ない。ゆえに、全て本人が何とかするしかないという完全個人作業である。

アシノはその一番最初の『どんな機獣を作るか』という点で行き詰っており、すでに週末の戦闘を何度も迎えた今でもただ見学するのみ、という有様だった。

ハルナが見る限り、明らかにアシノは戦闘に向いている性格ではない。

だが、魔導機獣使いの才能は貴重で、接近戦闘や射撃戦闘向きの能力を持つ人間の割合と比しても、その数は圧倒的に少ない。

ハルナ、ミナヒトたちが所属するクラスでアシノは、唯一の魔導機獣使いであった。

「アイディアといってもなあ」

ハルナは悩む友人を突き放す気はなかったが、なにしろ情報が少ない。まるで芸術作品について造詣の浅い人間があれこれ言うようなものにしかないからだ。

「……やっぱり、好きなものを好きなように作るしかないと思うよ。

ほら、なんだっけあの二組の子、あの子も猫好きだからあれにしたんだろ」

すでに戦闘でも活躍している、猫科の肉食動物型の機獣を例に挙げる。

先日の戦闘といい、ハルナはその機獣を高く評価していたが、操る本人とはほとんど面識がなかったし、あまり興味もなかったので名前は知らないでいた。

「そうかもしれないけどー、それで作ってヘボヘボだったらかわいそうだし……」

「じゃあ逆に嫌いなもの……はダメなんだっけか」

機獣の能力は相性、愛着によって左右されることが多い。本人が気に入らないものだとしたら、それは大体のケースで産廃状態の置物と化してしまう。

「すまんがやっぱり私に聞いてもどうにもならんぞ」